
Origin ~タイム・スリップ~

藍楼 天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Origin〜タイム・スリップ〜

【Nコード】

N2664A

【作者名】

藍楼 天

【あらすじ】

古代、『オリジンプレート』と呼ばれる万物の起源を使い大きく発展した文明を持つ国があった。その国は栄華を極めたが、やがて文明は滅んだ。そして現代。2人の少年が偶然見つけた1枚のオリジンプレートから、物語は始まった。

プロローグ

この世界には、「オリジンプレート」と呼ばれる、万物の起源がある。

それは遙か昔、魔力によって作られたプレート。

オリジンプレートにはこの世界のすべての理が記されており、それを利用することで人々はさまざまな力を手にした。

今から300年前。

魔科学研究が全盛期だったその時代、オリジンプレートを駆使することによって高度に発達した文明を持つ国があった。

世界の中心に位置するその国の名は、アーウェルト。

人々は魔科学によってオリジンプレートの力を引き出す術を知り、それを生活に役立て、高められた文明の中で暮らしていた。

だが、文明は突然崩壊を告げる。

原因も分からぬまま文明は滅び、オリジンプレートは世界中に散らばった。

そして現代。

かつての栄光を取りもどそうと、世界中に散らばったオリジンプレート
の発掘と研究が進められていた。

プロローグ（後書き）

まだまだ未熟ですが頑張つて書きました。
興味がありましたら続きもぜひ読んでみてください。

第一話 タイムスリップ

朝の早い時間だった。

彼はバロック建築の街並みをくぐり抜けるようにして走っていた。赤みがかった茶髪に、首都で一番有名なアカデミーの黒い制服。朝日を浴びた横顔はまだ若い。10代中頃だろう。

少年は大通りを避け、入り組んだ裏路地へ入った。

狭い壁と壁の隙間を器用に通り抜けると、3つ目の角を曲がる。すると、目の前はフェンスでふさがれていた。

彼は迷いなくフェンスに足をかけると、軽々と上る。

反対側へ飛び降りると、足元で丸々と太った白い猫が驚いたように鳴いた。

「おはよ、ブタ猫」

少年はその猫の頭を軽くなでると、また走り出す。

彼の名前は、リウ。

この国の首都に住む、ごく普通の15歳。

彼はいつも通り、アカデミーへと向かう近道を走っていた。

これから起こる事態など、知りもせず。

「リウ！」

大通りに出た時、聞き慣れた声が出て彼は振り返った。少し後ろから、登校する大勢の生徒に紛れて1人の少年が走ってくる。

「おはよう」

その少年は明るい金髪に、リウが着ているのと同じアカデミーの黒い制服を着ている。

彼はフィラ。リウの同級生で、親友である。

「おはよ、フィラ。今日はめずらしく早起きだな」

「なんだよ、めずらしくって」

フィラが顔をしかめた。

リウはからかうように笑う。

「いつも遅刻ギリギリで登校するのどこの誰だよ」

「うるせー。それよりさ、リウ。頼みがあるんだけど」

「?なんだよ?」

リウが聞くと、フィラは両手を合わせた。

「歴史のレポートやるの忘れてたんだけど、見せてくれね?」

「嫌だ」

リウが即答した。

「えーっ、なんでだよ！」

「お前宿題忘れるといつも俺に頼るだろ。たまには自分でやれ」

「それが嫌だからお前に頼んでるんだろ！」

「却下」

「なんだよ、ケチ！」

フィラは口を尖らせたが、リウが首を縦に振る様子はなさそうだった。ため息をつくとき、フィラはリウの肩に腕を回した。

「お前はいいよなあ。成績優秀の上に運動神経抜群でさ。さすが優等生」

「・・・お前、それ嫌味で言ってるだろ」

「あ、バレた？」

そんな会話をしながら、2人は校門をくぐった。

時は過ぎ、放課後。

夕日がほとんど誰もいなくなった校舎に差し込む。
そんな中、今は使われていない古い教室の中に、彼はいた。

「ああ……めんどくせえ……」

箒を片手に持ちながら、フィラが全くやる気のない声で呟いた。すると、教室のドアが開く。

「なんだ、こんな所にいたのか」

顔を出したのはリウだった。

「こんな所で何やってるんだよ」

リウが聞くと、フィラが不満げ声を出した。

「レポート忘れた罰として1人で掃除」

「罰掃除かよ」

うんざりしたような声で言ったフィラに対して、リウが笑った。掃除をする気配すらないまま、フィラが喋り続ける。

「明日までにレポートでかしてこいって言われるし……。なー、リウ。レポートって何について書くんだっけ？」

「古代の魔科学の発展とオリジンプレートの関係について、だよ」「オリジンプレート、ねえ……」

興味なさげに言うフィラは、乱雑に物が積み上げられ倉庫状態となった教室を見渡す。

リウは教室の中に入ると、古い本が積み上げられた本棚に手を伸ばした。

「……オリジンプレートって、今でも発掘が続けられてるよな」

「そうだな」

フィラの声に、リウが本から目を離さずに答える。

「でもさ。魔科学研究なんてとつくに衰退してるし、そんなもん今更発掘して何の役に立つんだろうな」

「オリジンプレートはそれ自体を使うわけじゃなくて、それをもとに古代の発展を研究するために発掘されているんだよ。」

「ふーん」

気のない返事をするフィラを背中に、リウは手にしていた本を本棚に戻す。

すると、その拍子に本の間挟まっていた何かが床に落ちた。

「？」

リウはかがんでそれを拾い上げる。

「なんだ・・・これ？」

それは、四角いディスクのようなもの。

手のひらにすっぽり入るほどの大きさのそれはだいぶ古いようで、もとは金色だったものが錆びて黒っぽくなっている。

よく見ると、表面には文字がびっしりと刻まれていた。

「なに？なんだよ、それ」

「さあ・・・」

興味を持ったフィラが、リウの傍らに近づく。

リウはフィラにそれを見せた。

「うわ、なんだこれ。何か書いてあるけど………これ、何語？」

「………多分、古代語だな。アーウェルト語。」

「読めそう？」

「うーん、どうだろう……。」

リウは目を凝らしてその文字を見る。

所々消えかかっている、読むのは容易ではなさそうだ。

「駄目だ、読めない。でもなんでこんな所にこんな物が……。」

そうリウが言いかけた、刹那。

『！』

2人は目を見開く。

刻まれていた文字が、金色に光り輝いた。

「わっ！」

驚いて、リウがそれから手を離す。

するとそれは床に落ちもせず、そこに浮かんだ。

瞬間、窓も開けていないのに強い風が巻き起こる。

「な………んだ………!？」

机に積まれていた本のページが勢いよく捲れる。

間もなく、辺りが眩い光に包まれた。

そして

．．．．風が、止んだ。

何事も無かったかのように、辺りは静かになる。
だがそこには 2人の姿は無かった。

第二話 オリジンプレート&It:前編>

「……………」

ぼんやりとした深い霧の中で、リウは目を覚ました。起き上がると、周りは濃い霧に包まれていて、何も見えない。

「なんだ……?どこだ、ここ……?」

リウが辺りを見回していると、隣で横立っていたフィラが起き上がった。

「フィラ……」

フィラは霧で塞がれた周りを見、そして呆然とした様子でリウを見た。

「おい……何がどうなってるんだよ……?」

リウが首を横に振る。

「わからない。でも……、海の近くなのかもな。潮の香りがする」

2人は立ち上がったが、どうしようもなく立ち尽くす。すると、リウは足元に何かが落ちていたのを見つけた。

「?」

それは、あの教室で見つけた、プレートのようなもの。

「あれ・・・？」

リウは目を見張って、それを拾い上げた。

そのプレートのようなものは、教室で見たときは古びていたはずだった。

だが、今見てみると、それは真新しく金色に光り輝いていたのである。

「どうなってる・・・？」

「俺に聞くなよ・・・」

2人は途方に暮れて顔を見合わせた。
すると

「・・・あ・・・」

霧が、晴れてきた。

目の前の景色が徐々に鮮明になってくる。

2人は目を凝らして、前を見た。

・・・霧が消え、視界が開ける。

前方に見えてきた景色を見て、2人は思わず言葉を失った。

そこには

見たこともない世界が広がっていた。

「な……んだよ、ここ……」

2人がいたのは、明らかに今までいた世界とは違っていた。

天まで届くような、背の高い建物の群れ。

その間を無数に通るレールの上を走る、モノレールに似た機械。空を自在に飛ぶバイクのようなものに乗っている人の姿もあった。

何もかもが、見たことのないようなもので埋め尽くされていた。

「！おいっ、足元見てみるよ！」

フィラが驚いたような声を上げた。

その声にリウが視線を下げる。

「わ……！」

足元にはタイルのようなものが敷き詰められていたが、一部分だけ透明になっていて、下が見えるようになっていた。
そこから下を覗き込むと 足元は、海だった。

「海に……浮かんでる……？」

リウが啞然として呟いた。

しばらく、2人は沈黙する。

そしてフィラが顔を上げると、リウを見た。

「なあ……、リウ……」

「なんだよ……？」

「これって……夢じゃないよな？」

「……多分……」

困惑しきった2人がそんな会話をする。

どうしていいか分からず、途方に暮れていた、その時。

「！リウ！！」

フィラが突然声を上げ、リウの腕を引っ張った。

「うわっ！」

引きずられるまま、2人のそのまま体制を崩した。

そして すぐ後ろで、爆発音に似た、轟音。

「え……？」

たった今リウが立っていた場所に、何かが突き刺さってい

た。

そして、2人の上から、影が落ちる。

顔を上げると

巨大な物体が、2人を見下ろしていた。

あまりの驚きの声を上げる事が出来なかった。

黙って2人を見下ろしていたのは、2メートル以上はあるであろう巨大なロボットのようなもの。

石で出来た頭と、巨大な胴体。腕と足は長く、異様だった。そして、手に握られていたのは、巨大な短剣。

「!!!」

手に握られていた短剣が高く振りかざされた時、2人はとっさにその場を避けた。

次の瞬間地面に短剣が突き刺さり、大きな音を立てる。

巨体が、ゆっくりとこちらを見た。

人間でいうと目の位置にある2つのライトが、赤色に光る。

『ニンゲン、ニンゲン、2タイ、カクニン。ハイジヨシマス』

その刹那、巨体はもう一度短剣を持ち上げた。

2人はちらりと目を合わせ、そして、それから逃げるように一気に

駆け出した。

「なんなんだよっ、あれ!!！」

「だから俺に聞くなよ!!！」

巨体を振り切るように、2人は複雑で迷路のような街の中を走った。だがそれは巨体の割に思ったより足が速く、すぐ追いつきそうな位置にいる。

「!!！」

2人は急に足を止める。

偶然入った路地の先は、行き止まりだった。

「やべえ・・・っ!!！」

振り返ると、巨体はすぐそこまで迫っていた。

『ニンゲン。ハイジヨ、シマス』

巨体が短剣を持った腕を上げた。

2人が息を飲んだ

刹那。

「気高き炎よ、我に示せ。灯るは魂の火
を焼き尽くせ」

その力で、彼の者

後方で声がした。

途端、目の前で爆発が起こる。

「!!！」

2人は思わず顔を覆った。
目も眩むような閃光と、衝撃音。
周りに煙が立ちこめる。

「……………」

辺りが静かになる。

2人が前方を見ると、巨体は爆発を直撃して粉々に破壊されていた。
そして、煙の向こうから、人影が現れる。

「…………大丈夫ですか？こんな所で、何してるんです？坊やたち」

声の主は、バラバラに壊れた巨体の隣に立った。

その人物は、20代後半ほどの男性。
眼鏡をかけていて、銀色の髪を持っていた。

2人は驚いてその人物を見てみると、彼は破壊された巨体を調べ始めた。

「けっこう派手にやっちゃいましたねえ…………プレートは無事かな？」

彼はちょうど巨体の背中部分にあたる箇所を調べていた。
面食らった2人が無言でその様子を見る。

「…………あの……………」

「ん？なんですか？」

「今、のは……………なんですか？」

突然目の前で起こった事態についていけずに、リウが聞いた。すると、彼は不思議そうに2人を見る。

「なにつて、魔術に決まってるじゃないですか。君達だって使えるでしょう?」

2人は顔を見合わせた。

少しの沈黙があつて、リウは口を開く。

「僕達は魔術なんて使えません。魔科学研究はずいぶん前に衰退してますから」

「ほう。面白いと言いますねえ、君。魔科学研究は衰退どころか今が最盛期じゃないですか。」

「はあ?」

フィラが怪訝な顔をした。

「そつちこそ何言ってるんだよ?魔科学研究が最盛期だった時代なんて、300年も前の話だろ?」

「300年前?」

今度は男性が驚いたような顔をした。

すると、彼はリウが持っていたプレートらしきものに目を留める。

「……それは?」

「えっ?」

男性はリウに近づくと、それを真剣な表情で見た。

彼の切れ長の目が、すっと細められる。

「……なあつ、そんなことより、一体ここはどこなんだよ？」

痺れを切らしたようにフィラが口を開いた。

男性はゆっくりと顔を上げると、2人を見る。

「ここはアーウェルト国の西に位置する、海上都市セルティですよ。」

「アー……ウェルト!？」

フィラが驚いて声を上げた。

アーウェルト。それはこの世界の中で一番の歴史を持つ、300年前に存在した国。

「嘘だろ?ここが、あのアーウェルトな訳……」

「本当ですよ。どうやら君達……こことは違うどこかから来たようですね?」

信じられない気持ちで、2人は顔を見合わせた。

リウが戸惑いながら口を開く。

「まさか……」

見慣れない景色。

現実離れた建物や、機械。

そして 歴史の授業で何度も聞いた、その国名。

「ここは、300年前の世界……?」

第二話 オリジンプレート&It;後編>

それから、しばらく経った後。

リウとフィラ、そして街で出会った男性の3人は、図書室のような背の高い本棚が並んでいる部屋にいた。見上げると、天井は吹き抜けになっている。男性の話によると、ここは彼の研究室らしい。

「まあ立ち話もなんですし。座ってください」
「はぁ。。。。」

大きな机の前に座った男性に促されて、2人は小さな椅子に腰掛けた。すると、男性が口を開く。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私はノエル。魔科学研究所の所長です。よろしく」
「。。。。」

のん気に自己紹介などしている彼に、2人は拍子抜けしたような気分になる。
とりあえず2人は名を名乗った。

「。。。。リウです」
「俺はフィラ。」
「リウ君に、フィラ君ですね。さて、それでは本題に入りましょうか。」

「オリジンプレート!?!」

リウとフィラが、そろって声を上げた。

「それ……オリジンプレートなんですか?」

「ええ、そうですよ。しかも滅多に発見されない時空間移動型のオリジンプレートです。」

「時空間……移動型あ?」

聞き慣れない言葉の連続に、フィラが顔をしかめた。
ノエルが言葉を続ける。

「オリジンプレートにもいくつか種類があるんですよ。時空間移動型というのは、世界でも稀にしか見つからないレアなものでしてね。その名の通り時間と空間を越えて移動することのできるプレートなんです」

「……」

説明されたものの、スケールの大きさにいまいち話がかめない2人である。

「要は、これを使えば過去に行ったり未来に行ったり、つまりタイムスリップが可能になるんですよ。」

「……マジかよ……」

フィラが信じられない気持ちそのまま言った。

しばらく、沈黙が流れる。

静かな空気の中、ふとリウが口を開いた。

「……あの、ノエルさん」

「なんです?」

「……その……」

リウは言葉を濁して、少しうつむく。

そして、思い切ったように言った。

「それで……もし俺達がタイムスリップしてしまったのなら、俺達は……300年後の未来に、帰れるんですか?」

リウは、真剣な表情でノエルを見た。

数秒間、空白の時間が流れる。

そしてノエルは、しっかりと2人を見据えた。

「……難しいですね」

静かな言葉だった。

2人は黙ったまま、ノエルの話を聞く。

「私はあまり時空間移動型のプレートについては詳しくありませんが、時空間移動型のプレートというのは、1度使ってしまうとその能力が失われると聞いたことがあります。君達がこのプレートで過去へ来てしまったのなら、もう1度これを使って未来へ戻ることは、容易ではないかもしれません」

重い沈黙が流れる。

リウは握っていた掌を握り締めると、もう一度問うた。

「じゃあ、俺達は……元の世界には、帰れなんですか……?」

真つ直ぐと、リウはノエルを見た。

ノエルは静かにリウを見ると、ふと穏やかに笑った。

「大丈夫ですよ。君達が未来へ帰る方法がない訳ではありません」

その言葉に、堅かった2人の表情が和らいだ。

ノエルはオリジンプレートを手にとると、話を続ける。

「考えられる方法は、このオリジンプレートをどうにかしてもう一度作動させること。基本的にオリジンプレートというのは、魔力があれば作動できるものなんです。」

「そうなんですか？」

「いや、でも時空間移動型のプレートについては例外だというのが定説なんですけどね。」

「・・・どっちなんですか？」

「はつきり言って私は専門ではないからよく分かりません」

「・・・。」

2人が訝しげな目でノエルを見てみると、彼は机の引き出しを開け大きな地図を取り出した。

「私の知り合いに、オリジンプレートについて研究している有能な学者がいます。彼に会って話を聞くといいでしょう」

ノエルは机の上に地図を広げると、ある一点を指差す。

2人は地図を覗き込んだ。

「ここが私達が今いるセルティです。ここから海を隔てた南東の方向にウエンイットという町があるんですが、彼はそこにいます。私

の紹介と言えば会えるでしょう」

「その人の名前は？」

「ティズ、といいます。若い学者ですよ」

話し終わるとノエルはまた地図を折りたたみ、しまった。すると、フィラが口を開く。

「でもさ・・・そのウェンイットとかいう町って、海を越えた向こう側にあるんだろ？そんな所までどうやって行けばいいんだ？」

「それもそうだな・・・。」

2人がそんな疑問を口にすると、ノエルが意味深に笑った。

「それは心配ありません。私にとっておきを特別に貸してあげましよう」

「とっておき？」

聞き返す2人。

リウが付け加えて訊いた。

「海の間ことうまで行く移動手段があるってことですか？」

「ええ。」

そう答えると、ノエルは立ち上がった。

「ついて来てください。きっと驚くと思いますよ」

「？」

2人は不思議そうに、にっこりと笑う彼を見た。

第三話 ネオゴーレム

「なん……ですか？これ……」

案内された薄暗い倉庫のような所で、2人は啞然として目の前にあるものを見上げていた。

「これが私のおきです。」

ノエルが楽しげに言った。

そこにあっただのは、ロボットのような巨大な機械だった。見たこともない金属で作られているそれは、頭、胴体、手足、すべてにおいて巨大である。その足で小さな家が踏み潰せそうだ。言葉も出ない2人に、ノエルが説明する。

「これはネオゴーレムといって、ゴーレムのオリジンプレートを基に私が作った機械なんです。進化したゴーレム、とでも言うっておきましようか。」

「ゴーレム……ってなんですか？」

「おや、ゴーレムを知らないんですか？」

ノエルが驚いたような顔をした。

「街で見たでしょう？石でできたロボットのようなもの」

その言葉に、2人は街中で突如2人を襲ってきた巨体のことを思い出す。

「あれがゴーレム？」

「ええ。そうですよ」

すると、フィラが怪訝な顔をして口を開く。

「ゴーレムって、一体なんなんだ？いきなり俺達に襲い掛かってきて……訳わかんねえよ」

フィラが言った言葉に、ノエルは目を細めた。

「……そうですねえ。少しゴーレムについて説明しましょうか」

そう言っつて、ノエルは話を続ける。

「ゴーレムというのは、元々国や街の警備などを目的に作られた機械です。オリジンプレートで動いています。ですが……」

ノエルは言い掛けて、視線を2人に移した。

「なぜかそのゴーレムたちが、人間を襲い始めた。」

「……どうして？」

「原因は分かりません。学者達の話では、オリジンプレートに異常が発生した、とは言われているんですがね。詳しい所は謎のままです」

すると、彼はポケットから1枚のオリジンプレートを取り出す。

「暴走を続けるゴーレム達に、警察だけでは手に負えなくなった。そこで私達トランセクターと呼ばれる者達が、先ほどのようにゴーレムを破壊し、そのオリジンプレートを回収しているんです。」

「へえ……」

2人は、そのオリジンプレートを見つめる。

彼らの持っていたものと同じように、それは金色に光り輝いていた。ノエルはオリジンプレートをしまつと、目の前の機械を仰ぐ。

「そして、回収したプレートを元に私が作った機械がこれです」

2人はその機械をもう一度見上げた。

説明されてみると、街で見たゴーレムに、その機械は似ていた。だが大きさが倍近くある。

「ネオゴーレムは、普通のゴーレムと違い、人が操縦することが出来るんです。」

「え？操縦？」

リウが間の抜けた声を出した。

「操縦って……これに乗るんですか？」

「そうですよ。ほら、あそこに操縦席があるでしょう」

ノエルが指差した先、ちょうど頭の部分に、確かに人1人が入れるくらいの操縦席があった。

すると、リウは慌てたように言った。

「ちょっと、ちょっと待ってくださいよ。まさか……俺達に、これに乗って移動しろと？」

「ええ。そうですが」

ノエルが当然だ、という顔をした。

「これだと空が飛べるので、海を越えることができます。」

「空を・・・飛ぶ!?これが?」

「そうですね。他にも水陸両用ですし、変形させることもできますよ。便利でしょう?」

その言葉に、フィラが声を上げた。

「冗談だろ!? そんなもの俺達に操縦できるわけ・・・」

「大丈夫ですよ。操縦方法は簡単です。」

「そういう問題じゃなくて!」

フィラが困ったような声を上げる。
すると、その時。

「ちょっと、ノエル!」

明朗な声がして、3人は振り返った。

見ると、倉庫の入り口に、1人の女性が立っている。

「おや。これはアンナさん」

ノエルがその女性を見て言った。

アンナと呼ばれた女性は、短い紅い髪が印象的な、若い女性だった。
彼女は3人の下へ歩み寄る。

「研究室にいないと思ったら、こんな所にいたのね。約束の時間はとっくに過ぎてるわよ!」

「おや、そうでしたね。すみません」

「いいから、早くネオゴーレムを貸しなさい」

そう言った彼女は、ふと、目の前のリウとフィラに気づく。
2人をしばし見た後、アンナはノエルを見た。

「……誰よ、この子達」

「ちょっと街で知り合っただんです。少し訳ありでして」

「?どういう意味よ?」

「実はですね。オリジンプレートによって300年前の未来から来てしまったと」

「……はあ?」

予想通り、アンナは怪訝な顔をした。

「何言ってるのよ。冗談言うならもっと面白いものを言いなさいよ」

「冗談ではありませんよ。」

「……私をからかってんの?」

「いえ。私は真面目です」

「……。」

アンナはじつとノエルを見ると、視線を2人に移した。
ほとんど睨むようにリウとフィラを見て、そして口を開く。

「……バカけてるわ。信じらんない」

「……。」

彼女の言葉に、フィラがむっとした顔をする。
すると、横で見ていたノエルが突然口を開いた。

「……そうですねえ。アンナさん、ちょっと協力してくれませんか?」

「？」

アンナがノエルを見た。

「これから仕事でルヴェルまで行くんですけどよね？」

「そうだけど？」

「だったら、この2人をウエンイットまで送り届けてもらえませんか？」

「はあ！？」

アンナが嫌そうな声を出した。

話についていけずに、リウが口を挟む。

「……何の話ですか？」

「ちょうどアンナさんが、ネオゴーレムでウエンイットの隣のルヴェルまで行く所だったんです。ですから、ついでに君達をウエンイットまで連れて行ってもらおうと思いましたが」

「嫌よ、そんなの！あんたが行けばいいじゃない！」

「私は研究所を離れることができないんですよ。あとネオゴーレムの操縦の仕方も教えてやってください」

「どうして私がそんなことしなくちゃならないのよ！」

アンナはノエルの提案を頑なに拒否する。

すると、ノエルは目を細めて意味深に笑った。

「困りましたねえ。……でもどうしても嫌だと言うのなら、ネオゴーレム貸してあげませんか？」

「なっ、なによそれ！卑怯よ！」

「私は少し協力してもらいたいです。いいでしょう？それくらい」

「……っていうか、無理矢理協力しろって言ってるようなものじゃない……!」

アンナは顔を引きつらせて、ノエルを見た。
しばらく無言で彼を睨む。

「……。」

「どうします?」

数秒の沈黙があった。

そして、アンナが口を開く。

「……わかったわよ。連れて行けばいいんでしょ!連れて行けば!」

投げやりな口調で彼女が言った。

すると、ノエルはにっこりと笑ってリウとフィラを見た。

「良かったですね。あとは彼女についていけば大丈夫でしょう」

「はあ……。」

いつのまにか当の本人であるリウとフィラをほとんど無視して、話は進んでいた。

『ホントにこれ、操縦するのかよ……』

数分後。

リウとフィラ、そしてアンナの3人は、それぞれのネオゴーレムの操縦席に座っていた。

各操縦席は無線につながっており、途方に暮れたフィラの声がリウの耳に届いた。

『っていつか、誰もまだこんな機械に乗るなんて言っていないし!』

『そう言うなよ。しょうがないだろ、これしか移動手段がないんだし』

『やけに冷静だな、リウ。うらやましい』

2人が無線越しに会話していると、釘を刺す声が聞こえてくる。

『ちよつと。無駄話してないで話を聞きなさい』

『?』

すると、アンナは早口で操縦方法を教え始めた。

『発進の仕方は手前にある赤いボタンを押した後、右上の一番大きなレバーを思いっきり手前に引くこと。いい? わかった?』

『え? 何をどうするって?』

『一度しか言わないからよく聞きなさい。加速は手元のレバーを前に倒す。減速は手前に引く。止まる時はレバーをニュートラルに。』

『そんなに一気に言われてもわかんねえよ!』

『うるさいわねえ。説明してやってるだけありがたいと思いなさい』

極端に不機嫌な声のアンナの指示に従い、2人は手を動かす。作業を進めながら、再びフィラが呟いた。

『はあー、それにしても信じられないよな。罰掃除してたらいきなり300年前の世界でさ……。しかもこんな訳のわからないものを操縦しろって言われるし。』

『俺だってまだ信じられない。ここがほんとにアーウェルトだなんてな……。』

『同感。っていつかお前さあ、こんなものほんとに操縦できる自信ある？』

『ない』

『言い切るなよ……。』

『話してないで手を動かさなさいよ。ったく、何で私がこんなこと……。』

2人の会話にアンナの愚痴が混じった。

一通り操縦方法を教わったあと、アンナが口を開いた。

『……。まあ、こんなものでいいわね。あとは体で覚えなさい』

『はあ……。』

フィラが自信なさげな声を出した。

すると、下にいたノエルが大きな声を出した。

『みなさん。そろそろいいですか？』

『いいわよ』

アンナが答えると、ノエルは手元の機械を動かし始める。

そして、アンナは再び無線で話し掛けた。

『発進するわよ。さつき教えたとおりに動かしなさい』
『……自信はないけど、頑張ります』
『同じく』

目の前にあった大きな扉が、徐々に開き始める。
暗い倉庫に、日の光が差し込んできた。

そして、フィラがリウに向かって、開き直ったかのように呟く。

『……行くしかない、よな』
『……そうだな』

リウもまた、呟くように答えた。

景色が徐々に開けてきたとき、リウは下を見る。

「……あの、ノエルさん」
「はい？なんですか？」

ノエルが顔を上げ、リウの方を見た。
リウは敬意を込めて、言う。

「……いろいろと、ありがとうございました」

真っ直ぐなりウの視線を、ノエルは穏やかな目で見返す。
そして、笑いながら言った。

「いいんですよ。無事に未来に帰れるといいですね。」
「はい！」

扉が完全に開いた。

前方に広がるのは、蒼い空と、大海原。

リウは、しっかりと操縦桿を握った。

『行くわよ!』

無線から聞こえたアンナの声が、発進の合図。

レバーを思い切り手前に引くと、機体が浮き上がった。

3体の機体が扉をくぐり

空へと飛び出す。

「……………幸運を、祈っていますよ」

1人残されたノエルが、飛び立った3体のネオゴーレムを見つめていた。

第四話 遭遇

「すげえ……空、飛んでるよ……」

操縦席の窓から外の景色を覗き込みながら、フィラが呟いた。

街を出ると、すぐに一面は海になった。

前方に見えるのは、遠くにある水平線だけ。

快晴の空の下、3体のネオゴーレムが順調に空を飛んでいた。

「よそ見してると落ちるわよ」

景色に見とれていたフィラに、アンナが釘を刺す。

フィラは興奮したような声で口を開いた。

「なー、リウ。空を飛ぶのもけっこう気持ちいいもんだな。現実離れしてるけど」

「なんだよ、さっきまで自信ないとか言ってたくせに」

「だって操縦するの案外難しくないし、こんな大自然の中を飛んでいくのってカッコよくない？」

「お前、のん気だな……」

リウがあきれたように呟いた。

すると、アンナが会話に加わる。

「ちょっとあんた達。一体ウェンイツのどこに向かうつもりなの？あんな田舎町に何の用？」

「ノエルさんにティズってという人の所に行くように言われたんです」

リウが答えると、アンナは怪訝そうな声を出した。

「ティズ？あの胡散臭い変わり者の所に？」

「アンナさん、その人を知ってるんですか？」

「知ってるわよ。変な奴よ、あいつ」

アンナの言葉を聞いて、フィラがぼつりと呟いた。

「……どんな人なんだろ」

「さあ……。」

そんな会話をしながら、一行は透き通った海の上を進んでいく。ずいぶん高い所を飛んでおり、海面が遠くに見え、空が近かった。しばらくした後、ふとアンナが声を出す。

「……ちょっと、止まって」

「えっ？」

いきなり止まれと言われて、2人は慌てて操縦桿を静止させた。

「どうしたんですか？」

「静かにして」

その言葉に、2人が黙る。

辺りは静かになり、さざ波の音が小さく聞こえてきた。

そのまま数秒間が過ぎた、刹那。

「……」

突然大きな咆哮がして、3人は上を見上げた。

見ると 炎の塊のような何かがある、こちらに向かって直進してくる。

アンナが声を上げた。

「ファイアバード!? よりにもよってこんな時に・・・!!」

「えっ?」

思わずリウが聞き返した。

「なんですか? あれは?」

「ファイアバードよ! とにかく逃げるわ! ついてきなさい!!」

「ええっ!?!」

瞬間、アンナの乗ったネオゴーレムが急発進した。

訳の分からないまま、2人はそれについていく。

すると、後ろの方でまた咆哮が聞こえた。

振り返って後ろを見たフィラが、声を上げる。

「なんだ・・・あれ!?!」

そこにいたのは 炎に包まれた、巨大な鳥だった。

見たこともないような鳥だった。

全身が燃え盛る炎で覆われていて、その体は巨大である。

口ばしは鋭く、今はこちらを狙っているようだ。

その鳥は咆哮を上げながら、ネオゴーレムを追いかけてきている。

「なんなんですか！？あの鳥！！」

「言ったでしょう、ファイアバードよ！人間を襲う凶暴な怪鳥で、この辺りに生息しているの。何もこんな時に現れなかったって……
・……！！」

アンナは苛立たしげに言う。

すると、後ろを見ていたフィラが口を開いた。

「っていつか、かなりいっぱいいるんだけど……！！」

瞬く間に、3体を追うファイアバードの数は増えていた。

それを見たりウが、呟く。

「今、俺達はファイアバードの群れに襲われてるって事ですか……？」

「そうよー！」

アンナがそう答えた時、後ろで何匹ものファイアバードが咆哮を上げた。

彼女は後ろをちらりと見ると、声を上げた。

「もっとスピードを出しなさい！あんな大群に追いつかれたら終わりだわ！振り切るわよー！！」

「そんなこと言われたって……！！！！」

2人は必死に操縦桿を握り締めていたが、ファイアボードの方が速度は上だった。

徐々にネオゴーレムとファイアボードの群れの差は縮まっっていく。

「おい……これって、かなりやばいんじゃないね……？」

フィラが焦りを滲ませながら呟いた。

と、その時。

「わ……っ!？」

一番後ろを飛んでいたリウが、思わず声を上げた。
機体が大きく揺れ、目の前が炎に包まれる。

「なんだ……!？」

上を見上げると 1匹のファイアボードが、機体に向かって炎を吐いている。

ファイアボードは大きな足で機体を何度も叩き付け、その度に機体は大きく揺れた。

瞬間、何匹ものファイアボード達が、リウの乗った機体に襲い掛かる。

「っ!」

「リウ!!」

目の前が炎に包まれる中、リウは必死に操縦桿を握り締めた。
だが、機体が揺れているせいで上手く動かない。

「くそ……っ!」

機体が激しく揺さぶられる。
刹那。

「清浄なる水よ、我に示せ。天の水門を開き
その力で、彼の者を襲え！」

アンナの声が響いた。
次の瞬間、海面の水が鋭い刃となって、ファイアバード達に襲いかかる。
水しぶきが上がり、ファイアバードは叫び声を上げながら海に落ちていく。

「あぶなっかしいわね！しっかりしなさいよ！」
「すみません」

アンナに怒鳴られて、リウが畏縮したように答える。
リウは窓越しに落ちていくファイアバードの姿を見て、ほっと息をついた。
そして、傾いた機体を元に戻そうと操縦桿を握った時。

「！？」

再び大きな揺れが起こり、視界がガクンと下がった。
窓から覗き込むと、1匹のファイアバードが、機体の足をしっかりと掴んでいる。

それは咆哮を上げると、機体を落とそうと思いきり下に引っ張った。

「うわっ！？」

瞬間、機体は一気に下へ引きずられる。

慌てて操縦桿を動かそうとした時、機体はファイアバードが引つ張る力のままに、落下し始めた。

操縦桿を動かしたが、大きな力で機体を引きずられ、まるで自由がきかない。

落下する速度が加速していく。

「ブレーキをかけて!!早く!!」

アンナが叫ぶ声が聞こえたが、あまりの速度で落下しているため鮮明に聞こえない。

残された2体のネオゴーレムの姿が、徐々に小さくなっていく。

「つ！」

リウが乗ったネオゴーレムは、ファイアバードもろとも海へと落ちていった。

第五話 海底

リウの乗ったネオゴーレムは、まっ逆さまに海へと墜落した。

勢いよく海へ飛び込むと、水しぶきと泡に包まれ、機体はゆっくりと海底へ落ちていく。しばらく下へ沈降した後、深い深い海の底で、機体は大きな音を立てて着地する。

・・・機体が止まったことを確認して、リウは静かに目を開けた。

「いつてえ・・・」

彼は片手で頭を押さえる。

海に落ちた際に思い切り頭を打ち付けてしまって、少し頭がくらくらした。

不鮮明な窓越しに周りを見ると、目の前にはただ広い海が広がるばかり。

しかもかなり深い所のようで、視界が悪くぼんやりとしか辺りが見えなかった。

「・・・なんでこんなことに・・・。」

リウはそう呟くと、耳につけていた無線機に手を当てる。

「フィラ？アンナさん？聞こえますか？」

試しに話しかけてみたが、ひどいノイズだけが返ってきた。
リウは途方に暮れてため息をつくとき、目の前の操縦桿を握る。

「これ、動くかな・・・？」

操縦桿を動かす。

・・・反応はない。

いろいろなボタンやらレバーなどを動かしてみたが、どれもこれも全く無反応だ。

リウがもう一度深いため息をつく。

「こんな海の底で故障かよ・・・。」

眩きながら、リウは窓から外を覗いた。
何も無い、ほの暗い水中が揺れている。
すると、

「わーっ、変な機械！」

「変な機械！」

「うわっ！？」

突然視界に飛び込んできたものを見て、リウは思わず声を上げた。
2人の小さな子供が、操縦席の窓を覗き込んでいる。

「な、なんだよ、お前ら・・・！」

「あつ、人間が乗ってる！」

「乗ってる！」

彼女達は心底驚いているリウを物珍しげに見た。

よく見ると、彼女達に足はなく、代わりに魚が持つ尾ひれがある。

「マー……メイド……?」

リウが啞然として呟く。

マーメイド、いわゆる人魚は、古代に存在していた魔法動物である。魔科学の衰退とともに絶滅し、現代では見ることでできない幻の動物とも言われていた。

そんな動物を目の前にして、リウはただ驚いて彼女達を見つめる。

「ほんとにいたんだ……。」

「ねえ人間、こんな所で何してるの?」

「何してるの?」

まだ幼いマーメイドの彼女達は、可愛らしい声で言った。

2人とも外見はよく似ていて、双子のようである。

リウは我に帰ると、戸惑いながら2人の問いに答えた。

「何してるっていうか……ファイアバードに襲われて、海に落

ちただけど」

「えーっ、あの怖い鳥に襲われたの?」

「襲われたの?」

「うん、まあ……。」

リウがなんともいえない表情で言う。

マーメイドと会話をしているなんて、変な気分だ。

とりあえず彼女達に、事情を説明する。

「仲間の所に帰らないといけないんだけど、この機体故障してて……困ってるんだ。」

「ふっん」

「へえ」

ちゃんと話を理解してるのかが微妙だが、人魚の少女達は興味津津な様子でリウを見る。

「ねえ、この機械つて魔力で動いてるんでしょ？」

「でしょ？」

「え？・・・いや、わかんないけど、多分」

リウが曖昧に言うと、彼女達は窓に顔を近づけて言う。

「姉様達が言ってたの。人間は皆魔力でできた機械を使って生活してるって」

「あ、そう・・・。」

「この機械、壊れてるの？」

「動かないの？」

「ああ」

「だったら、私達が直してあげる！」

「あげる！」

「え？」

突然の申し出に面食らったりリウが、驚いた声を出す。

「な、直すって・・・どうやって？」

「私達の魔力をこの機械に注ぐの。そうすればきつとまた動くよ！」

「動くよ！」

「魔力を注ぐ・・・？あつ、おい！」

そんな会話をしている間に、少女達はネオゴーレムの脇へと移動する。

すると、機体に向かって両腕をかざした。

「すべての力の源よ、我の声に応えよ。」

「我はその力を、彼の者へ分け与えんことを望まん！」

2人が声を上げると、一瞬周りは眩しいほどの光に包まれる。

一気に光が引くと、辺りはまた何事も無かったかのように静かになった。

「動かしてみて！」

「……………」

明るい声に、半信半疑ながらもリウが操縦桿を握る。

「まさか、そんなことはない、よな……………」

眩きながら、操縦桿を手前に引く。

すると、

「動いたー！」

「直ったー！」

ネオゴーレムは、息を吹き返したように思い通りに動いた。

「……………マジで？」

リウが信じられないような表情を見せる。

少女達は再び操縦席の前まで泳いでくると、嬉しげに言う。

「すすいじょよ？」

「でしょ？」

「そうだな、すげえ……。助かったよ。ありがとう」

素直に礼を言うと、彼女達は照れた様に笑った。

その時、耳につけていた無線機から、音が聞こえた。

『…………ウ、リウ！聞こえるか？』

「！フィラ!？」

耳を澄ますと、雑音混じりに確かに聞き慣れた声が出た。

『…………坊主、聞こえるなら返事なさい。』

アンナの声がし、リウは急いで応えた。

「聞こえています！」

『ちゃんと生きてるわね。』

「生きてますよっ」

リウが怒ったように言うと、心配そうなフィラの声が聞こえてきた。

『リウ、お前大丈夫か？』

「まあ、なんとか」

『とりあえず無事みたいね。機体はどう？動く？』

「さっきまで壊れてたんですけど…………」

そう言いかけて、窓越しに人魚達が声を上げた。

「人間、誰と話してるの？」

「ひとりごと？」

『・・・何？誰がいるの？』

アンナが少し驚いたような声を出した。

「あの、実はマーメイドに助けてもらって・・・」
『マーメイド？』

怪訝そうなフィラの声が聞こえた。

『何言ってるんだよ。マーメイドなんてずっと昔に絶滅したはず・・・』
『それがいるんだよ。何しろ300年前の世界だからな』
『はあっ？マジで？』

驚いたフィラの声を見殺して、アンナが口を開く。

『まあいいわ。それで、ネオゴーレムは動くのね？』
「はい」
『じゃあ後はどこで合流するかね・・・。つたく。センサーでもつけてればいいんだけど』

ぼそりと愚痴を言いつつ、アンナが思案するように口を閉じた。
少しして、再び声を上げる。

『・・・この近くに三角島っていう小島があるわ。そこで合流するのはどう？』
「場所が全然分らないですよ」
『マーメイドに聞けばいいわ。マーメイドならこの周辺の海についてはほとんど知っているでしょ』

そう言われて、リウは窓の外からまじまじと彼を見つめていた人魚達を見た。

「なあ、お前たち“三角島”っていう島、知ってる？」

「知ってるよ！」

「知ってるよ！」

元気な声で答えが返ってくる。

リウは再び無線で話しかけた。

「知ってるみたいです。」

『ついでに案内してもらいなさい。そんなに遠くないはずよ』

「わかりました」

『あ、言うの忘れてたわ。水中ではネオゴーレムを变形させておきなさい。じゃあ、発進するわよ』

「はい」

リウは視線を動かすと、人魚達が声を上げた。

「三角島まで行くの？」

「行くの？」

「ああ。ここから三角島まで案内してくれないか？」

「いいよ！」

「いいよ！」

「サンキュ」

彼女達に向かって微笑むと、リウは操縦桿を握る。

大きな音とともに、機体は地面からゆっくりと浮き上がった。

そしてリウはアンナに言われた通り、ネオゴーレムを变形させる。

「わ〜」

「すごーい」

人魚達が歓声を上げる。

ネオゴーレムは手足が短くなり、四角い潜水艦のような形になった。

「じゃ、行くぞ。」

「はっしーん！」

「はっしーん！」

2人の人魚は、楽しそうに泳ぎ出す。

1体のネオゴーレムが、それにゆっくりとついていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2664a/>

Origin ~タイム・スリップ~

2010年10月28日08時29分発行